

文芸大賞

色とりどりの光

大垣市立興文中学校三年 伊藤 彩良

何故私には、こんな力があるのだろう。時々、ふと考え
てしまう。私は人の背中に目を向ければ、光が見える。光つ
て見えるソレは人の心模様を映す、人間の根底にある核の
ようなものだ。と、解釈することにした。

この光の色によって、人の性格をなんとなく見分けること
ができる。例えば、母は紅葉のような橙色だから明るい人。
父は夏の生い茂った濃い葉の色だから誠実な人。こんな風に
イメージで性格が分かる。イメージで決めるのは偏見だけど、
案外当たるのだ。初対面の人の性格当てクイズは楽しい。
それに、コミュニケーション能力皆無な私にとっては便利な力
だ。

だが、何故私だけがこんな力を持っているのだろう。

「手話を習ってるの。すごいわね」

おばさん達が千鶴さんを称賛している。

四十、五十を過ぎた親戚のおばさんはどんな話でも盛り
上がる。私の母だつてずっと喋っていて独り言も多い。水が
無いと生きられない魚のように、口を動かし続けないと生き
られないのかもしれない。

ちなみに、このおばさんの光はオレンジジュースと緑茶を混
ぜたような色だ。掛け算もできないような年の頃に、好奇
心で混ぜてみたことがある。しかし、お世辞でも美味しい
と言えないほどまずかった。おかげで、自業自得のトラウマ
になってしまった。

「なんで手話なんか始めようと思ったの」

「あ、えっと、知り合いがやって。興味が湧いたので私も少
し勉強してみようかなと思ったら、沼にハマっちゃいました」

大学生の千鶴さんは世渡りが上手い。年齢関係なく誰と

でも話せるし、気遣いができる。けど手話を始めた理由を訊かれて、言い淀んでいた。それなら私もよくあることだが、一瞬間が曇っていた……ような気がする。

「今は手話通訳士を目指しているんです」

千鶴さんが言った。だからまた、おばさん達が称賛し始めた。

ハア。こつこつという宴会は嫌いだ。

今は正月。だから今日は柏木家一同で食卓を囲んでいる。始めてからも随分経つのに、女性陣は話の花を咲かせ、男性陣は酒を煽っている。もうすぐ良い子の寝る時間なのに。私がコアを飲んでみると、呆れ顔の母が私に言った。

「沙和。高校生になったんだから、その態度を改めなさい」

どうやら、「帰りたい」という思いが顔に出てしまっていたらしい。

「はい。じゃ、トイレ行ってくる」

「ちよつと沙和。もう……」

母の小言を無視して冷たい廊下に出る。そして、トイレではなく縁側へ向かう。ここは私の親戚の家で築六十年以上の古い家だ。私は縁側が好きだが、この家でしか座ることができない。一年に一度の集まりで、数少ない楽しみだ。

私が縁側からの雪景色をボーッと眺めていると、栗色の長い髪をなびかせた女性が隣に座った。千鶴さんだ。私は尋

ねた。

「おばさん達の相手に疲れたから、逃げ出してきたの？」

私が嫌味っぽく言えば、彼女は笑って答えた。

「違うよ。沙和ちゃんと話したかったからだよ」

千鶴さんの背中には、白い光が見えている。私が今まで見てきた人の中で、雪のように真つ白な光を放つのは彼女だけだ。だから、彼女は清らかで包容力がある。きつと、みんなの会話の輪に入れない私を気遣って来てくれたのだろう。

「沙和ちゃんはなんで逃げてきたの？」

ニヤニヤしながら訊いてきた。

「そんなの、千鶴さんはお見通しでしょ。わざわざ訊かないですよ」

私が怒ったように言うと、

「ごめんね」

と謝られた。

私は困ってしまった。謝られるのは苦手だ。どう返答すればよいのか分からないからだ。それに、感謝されるのも苦手。昔はこんな自分が嫌だったけど、今は光が見える力と引き換えにひねくれた性格になってしまったのだと思っている。

「そっさいばさ」

千鶴さんが話題を変えてくれた。

「青葉のことなんだけどね。おばさん達には話してないから秘密にしてね」

「うん、分かった」

青葉くんは、短髪の礼儀正しい男の子で、千鶴さんの弟だ。頭が良いとおばさん達が話していた。今はもう小学六年生だったはず。

「実は、相談があるの。聞いてくれる？」

「もちろん」

尊敬する千鶴さんに相談されるのが嬉しくて、即答した。

「実はさ、青葉が中途失聴になっちゃったんだ」

チュウトシツチヨウ？

言葉を理解するのに時間がかかった。詳しくは知らないが、

「耳が聞こえない」的な病気が障害だろう。つまり、

「大変な状況……ってこと？」

千鶴さんは苦い顔で頷いた。

「中途失聴っていうのは、生まれた時は大丈夫なんだけども、ある日突然、耳が聞こえなくなる障害なの。青葉の場合は、事故のせいでそうなっちゃったんだけどね」

私は返す言葉がなかった。こんなにも重い話だとは思わなかったからだ。何か言いたいのにも何も言えない。「可哀想」は余計に失礼だし、「大変だね」は他人事のようにだし。あつ。

もしかして、手話を始めた理由って青葉くんのかな。「知り合いがやってた」っていうのは嘘なのかも。私は尋ねた。

「だから千鶴さんは手話を始めたの？」

「うん。実はそうなんだ。青葉が中途失聴になってから、色々調べたの。そして手話が聾啞者や聾者の第一言語だって知って。あ、聾っていうのは耳が聞こえない障害のことね」

だからあの時、顔が曇っていたんだ。私は納得した。きっと、青葉くんのため、聴覚障害の人のために役に立ちたいという思いで必死に勉強しているのだろう。千鶴さんは、そういう人だ。

「ここで頼みがあるんだけど、青葉に会ってくれないかな」

「えっ」

驚愕よりも先に、なんで私？　と思った。適任者は私なんかよりも大勢いるはずだ。

「私、沙和ちゃんなら青葉を立ち直らせることができると思う」

「でも」

「お願い」

千鶴さんが真剣な眼差しで私を見つめてくる。だから断れなかった。

「分かったよ」

翌日。コートを着て、マフラーを巻いて、出かける準備は万端。

「行つてきます」

洒落たブーツを履いて、冷やかな空の下を歩く。ただ一つ、準備できていないものがある。それは、心構えだ。

私の頭には、「後悔」という文字ばかりが浮かんでいた。

なぜ断らなかつたのだろう。いや、断れなかつたのだ。千鶴さんにあんなに懇願されたら、会わざるを得ない。でも、私があまり親しくない人と喋れる訳がない。青葉くんとは、たまに顔を合わせても挨拶する程度の仲だ。いきなり会話なんて。

ん？

会話？

「いや、喋れないのか……」

つい、心の声が漏れてしまった。

中途失聴について聞いた後、自分でも調べてみた。どうやら中途失聴の人は全く聞こえないのではなく、聞こえにくいものらしい。難聴とも呼ばれ、手話はあまり使用せず、健聴者とは筆談が多いのだという。

青葉くんは手話ができるのだろうか。私だったら、今の自分を受け入れきれず、ベッドの上でダンゴムシになる。学校へ行こうとか、手話を覚えようとか、絶対に考えられない

い。想像しただけで、ゾツとする。青葉くんは、尚更怯えているに違いない。

色々考えている間に、着いてしまった。千鶴さんの待つ家に。

もう何年も前、小学校低学年くらいの時に家族でお邪魔した以来だ。白い壁の大きな家の庭先には、シクラメン、パインジー、ビオラなど季節の花が色とりどりに咲いている。

私はドアの前に立った。

ヤバイ。緊張してきた。なんて言えばよいのだろう。とにかくインターフォンを押さないと。

私が逡巡していると、

ガチャ

絶妙なタイミングでドアが開いた。

「いらつしゃい。寒いよね、早く中入って」

千鶴さんが笑顔で出迎えてくれた。

「千鶴さんナイス」

思わず言ってしまった。

「え、何が？」

「あ、いや、何でもない、お邪魔します」

リビングに案内され、ソファに座った。相変わらず、隅々まで清掃の行き届いている部屋だ。恐れ多くて虫も入れないのだろう。

「コーヒーか紅茶どっちがいい？」

「紅茶かな」

受け取った紅茶からは、ほのかにカモミールの香りがした。私はカモミールが好きだ。聖母に抱きしめられているかのような、安心感と落ち着きを与えてくれる。おかげで緊張が少しほぐれた。

「それで、青葉くんは？」

「勉強終わらせてから降りてくるつて。もうそろそろ降りてくると思うよ」

勉強してるんだ。そう思って驚いた。何かを失ったからといって、必ずしも引きこもってしまうとは限らないのかもしれない。私が感心していると、急に声をかけられた。

「沙和さん。こんにちは」

声変わり前の、大きな声が聞こえた。青葉くん。啞然、呆然、驚愕。これがこの時の私に当てはまる言葉だ。青葉くんが喋っていた。それに、去年の正月に挨拶した時から、何ひとつ変わっていないような気がする。

「なんで」

「右耳だけは聞こえるんですよ。だから、補聴器があればなんとか会話できるんです。あ、でも小さい声と早口は何言ってるのか分かんないので、大きな声でゆっくり話してください」

なんだか、拍子抜けした。補聴器は目立つが、全然大丈

夫そうじゃないか。千鶴さんは「沙和ちゃんなら青葉を立ち直らせることができると思う」と言っていた。それはどういう意味だろうと思っていたが、立ち直らせるも何も、彼を前を向いている。良かった。

「青葉くん。良かったね。その、音だけじゃなくて、声まで失わなくて」

私は言った。しかし、言葉選びを間違えた気がする。なぜなら、ほんの一秒ほど不穏な空気が流れたような気がするからだ。それでも、青葉くんは微笑んだ。

「うん。じゃあ俺、また勉強してきまーす」

彼は軽く言い残して、自分の部屋へ戻って行った。

あつ！

私は気が付いてしまった。私よりも小さいその背中に、光が宿っていないことに。

とりあえず紅茶を飲んで、この状況も呑み込もうとしたが上手くいかなかった。仕方ないので、考えることにしよう。

光が宿っていない人は初めてだった。正確に言えば、米一粒くらいの小さい光だった。光は基本的にリングくらいの大ささだ。赤ちゃんでもミカンくらいはある。と言っても、光のサイズが大幅に変わることはない。

以前見た時、青葉くんの背中は明るい水色に光っていた。

その水色は春の空のように温かく感じた。しかし米一粒の光になるということは、青葉くん自身が全然大丈夫じゃないということだ。それなら、私はどうすればよいのだろうか。「沙和ちゃん驚いたよね。実は青葉、学校には行ってないけど、喋れるし元気そうでしょ」

私は千鶴さんの言葉に頷いた。

「でもね、そう見えるだけで本当は苦しんでるの。青葉は学校を休んでる分、これ以上家族に心配かけたくないと思って家族の前では元気なフリしてる。けど、やっぱり、お姉ちゃんには分かつちゃうんだ」

彼女は悲しそうに、困ったように笑った。この言葉から、彼女の本心が垣間見えた。その表情を見て強く思った。そりゃそうだ、姉弟なんだから、と。私は二人の絆に胸を打たれた。

「青葉くんのためにできること、一緒に考えよう。私も協力するから」

私がそう言うと、千鶴さんは目を丸くした後、微笑んだ。

「沙和ちゃんに相談して本当に良かった。ありがとう」

「あ、うん」

私はなぜか、感謝の言葉を素直に受け取ることができた。

「で、どうする」

「うーん、どうしよう。聴力が治ることはないから、手術できないし」

「そうなんだ」

「うん。それに、治るなら事故に遭った後にすぐ手術してるよ」

「そりゃそうだね。それに千鶴さん、ブラコンだもんね」

「やめてよ。そうじゃないから」

今は作戦会議中だ。青葉くんのためにできることをしようとは言ったものの、何をすればよいのか分からない。これは致命的だ。とにかく、案を出しまくるしかない。

「無難にプレゼントとか、旅行とか。いや、そんなものと、青葉くんの苦しみは天秤にかける必要がないくらい違うよね」

「青葉は何やつても喜んでくれるし」

人を立ち直らせるということは難しい。それに千鶴さんはまだしも、私は誰かのために何かをしたことなんてほとんどない。二人して、早速行き詰まった。

「そういえばさ、手話やってみてよ」

唐突ではあるが、言葉以外のコミュニケーションに触れてみたかった。千鶴さんは快く承諾してくれた。

「じゃあ、やるね」

千鶴さんはまず、右手の人差し指を自分に向けた。

「私は」

次に、右手の親指と人差し指の指先を合わせてコップの持ち手を持つような形を作り、同じ形をした左手はスプーンでコップの中を混ぜるようにクルクルと動かしした。

「コーヒー」

そして、広げた左手のひらを上に向け、その上に五本の指を軽く曲げた右手の指先を立て、右手を軽く揺らした。

「ゼリーが」

最後に、右手の親指と人差し指でし字を作り顎の下に持っていく。顎をつまむようにして二本の指を近づけていく。

「好きです」

今の手話は「私はコーヒーゼリーが好きです」という意味らしい。

動作は複雑だったが、

「すごい」

と私は感心した。他にも、チョコケーキ、ワッフル、ドーナツ、お団子などスイーツの手話ばかり教えてくれた。

私は、手話というものに魅了された。まず、口ではなく手で話すこと、言葉ではなく動作で想いを伝えることが素晴らしい。そして、聾の人にとっての手話と、私にとっての光が見えることは似たようなものなのかな、と思う。もちろん、私の場合は会話なんてできないし、一方的に性格が

何となく分かるだけだ。でも、人が当たり前前に持っているものとは違って、なんというか……。

ああ、もう！

私の語彙じゃ語れない。けど、何か特別なところが共通している気がする。ただの直感だけれど。

とにかく、この感情を誰かに話したかった。

「千鶴さん。手話ってすごいね。言葉以外で誰かと繋がることのできるの、えっと、その、素敵なことだなって思う」

私は、照れながらも素敵だという言葉をお口にした。こういう言葉を、自分の声に乗せて誰かに届けるという行為は初めてかもしれない。少し恥ずかしかったが、とても気持ち良かった。日光を存分に浴びた雲の上で、昼寝をしているかのような気分だ。

千鶴さんは微笑みながら、しかし力強く言った。

「沙和ちゃんがそう言うってくれて嬉しい。これから私、もっと手話の勉強頑張るから。障害のことも学んでいく。世界に貢献できなくても、せめて意味のある歯車になるから」

「意味のある歯車……」

彼女の言葉を復唱した。確かに、誰かのための小さな、小さな歯車になるのも悪くないのかもしれない。

「千鶴さんなら多分、なれると思う。応援してるよ」

「そこは多分じゃなくて、絶対って言うところですよ」

指摘されてしまった。どうやら、口下手な私は言葉選びを間違えてしまったらしい。

「ほら、織田信長が絶対は絶対にないって言ってたじゃん。まあ、とにかく約束ね」

自分の失敗は適当に流しておいた。

すると、千鶴さんが言った。

「そうだ。約束っていう手話教えてあげる」

彼女は両手の小指同士を絡ませ、上下に軽く振った。

「手話でも、小指を絡ませるのは変わらないだね」

私は率直な感想を言った。そして、千鶴さんと二人で笑った。

あー、眠い。どうして始業式はこんなにも眠くなるのだろうか。もしかしたら、エアコンからラベンダーのようなお香が出ているのかも。

冬休みはあつという間に終わり、学校が始まった。新学期になっても青葉くんは学校に行っていないが、四月から特別支援学校へ行かせるらしい。

私と千鶴さんは結局、青葉くんのために何かをすることができなかつた。あんなに深い話をしたのに、良い案は何一つ思い浮かばない。やはり、現実には厳しい。どんなに理想を語り合っても、神様は希望を落としてくれない。

話を聞かずに考え事をしていると、教頭先生の声が耳に入ってきた。

「というわけで、一週間後、聴覚障害者の瀬川さんに話を伺いたいと思います。普段は手話で会話しているようですが、皆さん分かりませんよね。なので、筆談でご自身の体験を話してくださいさるそうです」

どういうわけか分からないが、自分にとって寝耳に水、いや、棚から牡丹餅の話だということは分かった。私はすぐ、千鶴さんに連絡した。

冬休みが明けて一週間後の七限目。面倒くさいと騒いでいた生徒達は、瀬川さんが教室に入ってきた途端、静まり返った。私達はもう十六歳だ。古文が読めるなら、空気を読める。

瀬川さんは四十歳前半くらいの男性で、背が高く、クールな印象だ。背中には、鉾山から掘り出したアメジストのような紫色の光が宿っている。

「みんな、紹介します。この方が瀬川健治さんです」

担任の加奈子先生が言った。背中には向日葵のような光を宿している。

瀬川さんはお辞儀をし、スケッチブックに言葉を綴っていた。

授業が終わった後、

「ありがとうございます」

とクラス全員でお礼を言った。もちろん、教えてもらった手話を添えて。胸の前にある左腕を、右手の手刀ではじくように叩く。これが、ありがとうという意味の手話だ。

みんなが帰り支度をしている時、私はノートを持って瀬川さんに駆け寄り、肩を叩いた。

「少しお話しですか」

そう書いたノートを瀬川さんに見せた。

ピンポン

インターフォンを押したら、千鶴さんがいつもの笑顔でドアを開けて招き入れてくれた。

「沙和ちゃん、いらっしやい。瀬川さん、初めまして。今日はお願ひします」

千鶴さんが手話で話しながら頭を下げた。実は、瀬川さんに青葉くんと話してほしいとお願いして、連れてきたのだ。青葉くんにとって、実際に自分と同じ体験をした人と話すのは、効果的な事だと思ったからだ。

しかし、私にここまで行動力があるとは思わなかった。それに人見知りの私が、この家まで瀬川さんと共に歩いてきたのだ。一年前の、いや、一か月前の私が聞いたら驚いて

尻餅をついてしまうだろう。

「青葉くんには話してあるの？」

「ううん。話したら面白くないでしょ」

千鶴さんは意外にもユーモアを求めるタイプらしい。

「ソファに座ってて。青葉を呼んで来るね」

前と同じ紅茶を出してくれてから、呼びに行つた。カモミールティーを一口飲んだ瀬川さんの顔がほころんでいた。やはり、カモミールには穏やかな気分にさせる効果があるのだ。その時、青葉くんの声が聞こえた。

「あれ、沙和さん。と、誰？」

千鶴さんが説明した。

「彼は瀬川さん。あなたと同じように耳が聞こえないの」

「えっ」

青葉くんは予想通り驚いている。というか、有り得ない状況に戸惑っている。

「じゃあ、ごゆっくりどうぞ」

千鶴さんが言った。私と千鶴さんは部屋を出て、廊下から様子を伺った。

先に話したのは青葉くんだ。

「やっぱり、苦しかったですか」

大きな声でゆっくりと話している。その質問に対して瀬川さんは、時間をかけてノートに文字を書き連ねた。そこ

にはこう書かれていた。

「僕は何の前触れもなく、急に中途失聴になった。はじめは苦しくて生き地獄だと思っていたが、陽は沈み、また陽は昇る。この世界は、僕一人がこんな目に遭っても何も変わらない。だから、受け入れるしかなかった。それに、こうでもならないと分からないこともある。落ち込んだとしても、気負わず、笑って、生きていけばいい。僕はそう思う」

ここからじゃ青葉くんの顔は見えないが、背中なら見える。米一粒だった小さな光は少し大きくなり、その水色は春の空を彷彿させた。さらにもう一つ、別の光が彼の瞳から滴り落ちたように見えた。

「この前、声まで失わなくて良かったねって言われたんです。けど、その慰めに何故か、無性に、腹が立ったんです」

青葉くんが言った。

その言葉に聞き覚えがあった。私が無神経に放った言葉だからだ。

「他にも、可哀想とか大丈夫？ とか、何気ない言葉に勝手に傷ついて。そんな自分が嫌だった……」

瀬川さんは青葉くんの言葉を真摯に受け止め、優しく彼の頭を撫でた。

桜の舞う、柔らかな季節がやって来た。私は進級するだ

けだが、青葉くんにとっては新たな一步を踏み出すための季節だ。

それに、私だつてこの冬、変わったのだ。例えば、ありがとうを素直に受け取れるようになった。そして、青葉くん「無神経なこと言っちゃつてごめん」と、ちゃんと謝罪した。

すると千鶴さんは、

「沙和ちゃん変わったね。前よりも生き生きとしてる」と言ってくれた。さらに、優しい子だと褒められた。自分ではそんなことないと思っているが、確かに以前よりは前向きになった気がする。

さて、問題は新しい担任の先生だ。男性だろうか、女性だろうか。何色の光を宿している人なのだろうか。

光の色は人それぞれ異なっていて、どの光も眩しい。赤い光も白い光も黒い光も、唯一無二の美しい輝きを放っている。

私だけがこの力を持っている理由は分からないけれど、知る必要はないのかも、と思う。意味のある、小さな歯車になることができれば、それでいい。

私は空を見上げた。春の空は素敵な色を帯びていて、温かく感じた。

優秀賞

宇宙船と投票と生き残り

大垣市立興文中学校二年 鳩田 結宇

プロローグ

宇宙船に搭載されたAIの記録を見る。

生存者ヒヨコ・シュターゼン	二十四歳	女
御門司	二十六歳	男
乙山源	二十一歳	男
一ノ瀬玲奈	二十三歳	女
森瓦鷹継	二十六歳	男
渋谷唯華	二十二歳	女

一章 唯華

休憩室につくと、中からヒヨコがぶつぶつと呟く声が聞こえる。彼女がいきなり船内放送で全員招集をかけたのが十分前。眠りにつこうとしていた私は急いで髪や服を整えてここにきた。ドアを開けると、少し黒ずんだ白衣を着て、い

つもと同じ度の薄い丸い眼鏡をかけた彼女が正面に立っていた。いつもは冷静で凜としていたけど、今日は何か気が立っているように見える。他のみんなはすでに集まっていて、椅子に座っている。私は近くにあった椅子に座りながら聞く。「どうしたの？急に集合かけたりして。なんか問題でも起きたの？」

「酸素は特に問題は起きてないですよ」

「操縦プログラムも何度も確認しましたけど特に問題はない……と思います」

司さんと玲奈が代わりに答える。ヒヨコは黙ったまま何か呟いている。

そこから一分後くらいのとときに、鷹継が大きな体で貧乏ゆすりをしながら聞く。

「それで、何があったんだよ。酸素枯渇日までのあと一週間

までに船体の壊れがないかもう一回チェックしないといけないんだ。早くしてくれ」

ヒヨコは、一度深呼吸をして椅子に座り、全体を見ながら話し始める。

「最初、私たちが保存されていた大人数収容型の復元装置が壊れたから予備にある一人用の復元装置を使うって話は覚えてるな？」

「すまん、復元装置ってなんやったっけ？」

源さんが茶髪の頭を掻きながら聞く。ヒヨコは困った顔をしつつも答え始める。

「人をデータ化、分解して決められた年数がたてば再構築してくれる装置のことだ」

「一番初めにした話だろ？それがどうしたんだ？」

鷹継が続きを促す。

「悪かったとは思ってる。もっと早めに言っておけば何か対処できたかもしれない」

一息おいて、ヒヨコが再び口を開く。

「予備の装置を保管していた圧縮装置が隕石の衝突の影響で壊れていて、私が確認した時点で大半が使い物にならなくなっていた。現状、安心して使える装置が五体しかない」

「……え、五体しかないんですか？」

玲奈が声を震わせながら聞く。復元装置は、私たちが

二百光年以上も遠くにある第二の地球となる星へ行くのに必須となる道具だ。

「待てよ、今ここにいるのは六人だろ？」

鷹継の言葉の続きをヒヨコが紡ぐ。

「ああ、一人分足りないということになる」

空気がピンと張る。一人分足りない。彼女の言葉が頭の中で反芻される。

「待つてくださいよ。予備は初めに聞いた話じゃ乗船した人数の半分……五百万人分は用意されているんじゃない」

「そもそも、各国から金を出し合って共同開発したっていう装置なんだろう？そう簡単に壊れていいのかよ？」

「はじめ見た時点ですでに半分はだめになっていた。そこから、手で宇宙船操縦していた期間で数回衝突未遂が起きただろ？そのときに装置が壁とぶつかったりして壊れまくったんだ。この船のためだけに作られた最新技術の装置だったからな。耐久面にまでお金を向けられなかったんだろ」

ヒヨコが答えると、操縦担当だった源さんがとっさに言い返す。

「衝突未遂で壊れたって、そんな言い方やめてや。こっちは経験ないんやぞ」

「別に責めているわけじゃない。原因の話だ」

「だから原因は俺にあるって言いたいんやろ!」

状況が分かってきたからなのか、言葉がどんどん熱を持っていく。

「原因はもうそこまで大事なことじゃないでしょ。落ち着いてよ」

私がそういうと、源さんはため息をついてから椅子に座りなおした。ヒヨコが話を続ける。

「現状、どうにせよもう五体しか残ってないんだ。つまり……」

「一人だけ復元装置を使えない人が出てくるということですか？」

司さんが声を震わせつつも冷静に聞く。

「待って待って、第二の星につくまでに最低でも二百光年はかかるんだろ？使えなかった人はどうなるんだよ？」

鷹継が聞く。そうだ、私たちにとって星へ行くには装置が必要不可欠だ。私がある結論にたどり着いたとき、玲奈がそれを呟く。

「使えなかったら……死ぬっていうことじゃ……」

「そういうことになる」

ヒヨコが答えると、誰もしゃべれなくなる。しばらくの沈黙の後、司さんが四角い眼鏡の位置を調整して話す。

「つまり、今、僕たちを呼んだのは『死ぬ人』を決めるため、ということですか？」

ヒヨコが無言でうなずくと、再び重い沈黙が流れる。

「えっと、装置は修理することできないの？装置について知っているヒヨコが指示して鷹継が直すって感じで」

ヒヨコがみんなに話すということはもう他に策がないことは分かっていたけど、それを受け入れたくなくて代わりの案を出す。

「無理無理、同じ機械でも宇宙船と装置じゃ構造が全然違う。それにもし修理したとしても安心して使えないだろう？」

鷹継が強く断ると、私は言葉に詰まる。

「それで、どうするんよ？確実に一人は死なないかんってことやろ？自ら立候補してくれる人はおらんやろ」

源さんが椅子から立ちながら聞く。いつも通りの声だけど、額には汗が滲んでいる。

「クジで、決めるのはどうですか？ひ、一つだけ先が赤くなっている。というのは」

玲奈が提案をする。クジ、確かに公平だけど、赤いのを引く確率は六分の一。百パーセントではないけど、今はそれを絶対に引いてしまうように感じてしまう。

「却下する。不正が起きる可能性もあるし、何より今になって運には頼りたくはないな」

ヒヨコが拒否すると、もう一度静寂が訪れる。

「……提案があります。一人一枚ずつ紙をもって、その紙

に一人だけ、『装置を使わない方がいい』と思った人の名前を書きます。それを集計して、一番票数の多かった人が使えない。というのはどうでしょうか」

司さんが、周りの顔を伺いながら案を出す。死ぬ人を投票する。その行動が、どれだけ残酷なことかは理解しているつもりだ。でも、私は積極的な方だとは思って、よく話している方だと思ってる。クジよりも死ぬことになる確率は低いはずだ。

「そ、そんな、死ぬ人を直接決めるなんて……!」

玲奈が否定する。けど、私は死にたくない。

「でも、それしか方法はないんだよね? やってみようよ。一回」

悩んでる素振りを見せながら、私は賛成した。

「まあ、やるしかないよな」

「私もそれに賛成する」

他のみんなも続々と賛成し、投票制ということになった。大丈夫、もし危ないと思ったら鷹継のあのことを全員に話せばいい。

第二章 源

「で、どうやって投票先を決めるつもりだ? 明確に定義づけて投票すべきだろ」

鷹継の言葉に対し、ヒヨコが提案する。

「貢献度、にしないか? 今までどれだけ役に立てていたか。頑張った者は当然報われるべきだ。私はそう思うが」

少しの間、全員が提案に乗るべきかを考える。

一番初めに口を開いたのは、さっきまで投票制に反対していた玲奈だった。

「そ、それなら、賛成、します。ほら、新しい星について後事も大事ですし」

俺は、自分がさっき投票制に賛成したことに後悔する。もし、本当に衝突未遂が原因で装置が壊れたとするのなら、貢献度で言えば俺が圧倒的に不利。そのことに気づいたのかと鷹継も賛成する。

「それじゃあ、貢献度で決めることにする」

「それじゃ、全員、今まで何してきたか言っつけ。俺は宇宙船の修理をしたぞ」

鷹継の声を皮切りに、全員が話し始める。

「私はこの宇宙船と復元装置についての説明と動作確認をした」

「わ、私は、また隕石とかと衝突が起きないように、宇宙船の操縦プログラムのバグを直しました」

俺は気づく。そうか、ヒヨコがこれを提案したのも、玲奈がそれに賛成したのも、絶対に選ばれることがない基準だったからか。

「僕は酸素の管理をしていました。人が使用していませんところには供給を止めたりして、限りある量を最大限に節約しましたよ」

「私は……みんなの健康状態を確認しに巡回したり、宇宙食だから簡単だけどご飯作ったり……時間があつたときは、みんなの手伝いしたりした……くらいかな」

二人が話し終えると、残りは俺だけになる。落ち着け、まだ俺になるって決まったわけじゃない。頭をフルに稼働させてできる限り反感を買わないように話し始める。

「俺は、宇宙船の操縦や。プログラムを修理してる間は手で操縦する必要があつたからな。……数回、ぶつかりかけた時はあつたけど」

「そのせいで装置が足りなくなつたんだよな？」

鷹継が責めるように言ってくる。まだ話し終わってないのに割ってくるなよ。どうにせよ、俺が標的にされているのは分かる。

「やけど、俺がおらんかったら隕石はぶつかつてたんやぞ？
マイナスはあれどプラスやろ」

「それで？全員プラス以上は動いてんだよ。それは前提の上で誰が役に立ってなかつたかを話してんだ。お前だけだろ？
ミスしたのは」

俺が考えてひねり出した反論もすぐに言い返され、何も

言えなくなる。勝負あり、か。選ばれるのは俺だな。諦めようとしたその時、

「ねえ、なんで鷹継は安全圏にいるの？」

唯華が話し始めた。鷹継も、俺も、全員が驚いている。

「そりゃ、俺は宇宙船の修理をしてたからで」

「一週間だけ、でしょ？」

言っている意味が分からず、呆気にとられる。一週間しかやつていない？そもそも、なぜ唯華は今鷹継に標的をむけた？

「私さ、体調確認のために巡回してたじゃん？その時に何回も鷹継がいるところにも行つたけどさ、ここ最近はずっと作業してる姿見たことないんだよね」

「それはお前がたまたま休憩中によく来てただけで……」

「それだけじゃない。えっと……ああ、これ」

そう言つて彼女は宇宙船の履歴を開く。それは、今までのネジなどさまざまな種類の使用履歴が残されたログだった。

「目が覚めてからの一週間はたくさん備品を使つてるよね。でもコレ、見てよ」

唯華がみんなに見せてきたのは直近一週間の使用ログだった。最初に見せた使用ログと違い、使われている備品の種類が二種類しかないうえ、「持出ログ」と「返却ログ」に書

かかれている数がどちらも二十と書かれていた。

「ちゃんと修理してるのなら数は減るはずだから、持出個数と返却個数が同じになるなんてありえないでしょ？」

唯華が鷹継に聞く。鷹継は俯いて考え始める。額に滲む汗が、顎を伝って滑り落ちたところに鷹継が冷静に話し始める。

「認めるよ。確かに、一週間たたずで故障してたところは全部直し終わった。そつから今まではずっと仕事をしてるフリだ」

「それなら、なんで報告しなかったんです？」

司が、至極真つ当な質問をする。また少し間をおき、鷹継は話し始める。

「俺は生まれつきめんどくさがり屋でね。終わったって報告したら別の仕事を頼まれるだろ？めんどくさがったんだよ。……でも、だから何だよ？俺はこの船じゃ失態は起こしてねえぞ？ちゃんと最初に与えられた仕事はきっかりこなしてる」

鷹継の話を聞きながら、チャンスだ。今、投票先を鷹継にするように仕向ければ、全然生き残れる可能性はある。そう思った俺は、鷹継が別のことを言い出す前に話し始める。

「でも、誰かがそばにいてくれてたら俺はもっと安全に隕石

を回避できてたと思うけどな」

「操縦はお前の仕事だろうが」

「それに、めんどくさいってだけで仕事の報告をしないって、新しい星についたとしてもまったく信用できないと思うけどな」

「……今は貢献度の話だろ、ついた後の話は関係ないだろうが」

「いや、俺、思うんやけどな？実際、誰か一人生かせたくない奴が出てきたらどんなにいい働きしてもそいつに入れるんちゃうかな？別にそれが絶対ってことでもないし」

自分は何もしていないまま来たチャンスを、手放したくない。鷹継だけを狙おうと俺は必死にみんなが鷹継に入れるように仕向ける。周りは、少し悩んだように考えている。

「確かに、貢献度はあくまでも基準の話だから、結局は信頼度勝負になるだろうな」

ヒヨコが呟く声が聞こえる。少しの間をおいて、鷹継が話し始めた。

「……分かった。それがあんならこつちだって言えることはたくさんある。お前らがいいならやってやるよ。始めようぜ、暴露大会を」

第三章 鷹継

暴露大会なんて言葉を口にした途端、この部屋の空気が止まったような感覚になった。正直、俺が知ってる秘密といえるようなもんは司の分しか知らないし、それによって俺が助かれるかと言われたら絶対にそうだとは言えない。それでも、試してみる価値はあるはずだ。

「俺が言うよりも自分から言った方が罪は軽くなると思うけど、誰も言わないんだ」

一旦、誰かが自ら罪を話してくれないかと期待して鎌をかけてみるが、誰も反応しない。なら、もう言うしかない。「司、お前って本物の司とは違う人間なんだろう？なりすましてやつだ」

「……変な冗談はやめてください。自棄にでもなりましたか？何を根拠に言ってるんです？」

司が、いつもの丁寧な言葉遣いは変えないまま話し続ける。が、その眼には明らかな動揺が混じっている。俺は続きを話す。

「本来の司は地球にいた時、宇宙船開発に携わっていた会社で若くして最高技術管理者になった天才だった。おかしいんだよ。賢さ、性格のなにもかもがアイツと違う」

「それが何になるんですか？あなたが出まかせを言ってる可能性は十分にありません。それに、それが本当だとしても、

なんであなたはその人のことを知っているんです？」

俺は思わず笑いが浮かぶ。

「なんで知ってるかって……そりゃ、俺と司は幼馴染だったからな。俺のことを覚えてない時点でお前は司の偽物だ」

ここまで喋ったところで、俺は周りを見る。みんな、驚きとも嫌疑とも取れる目で俺かあいつを見ている。司が、咳くように反論する。

「……そりゃ、運が良すぎませんか？世界で適当に選ばれた六人の中に知り合いがいるなんて天文学的な確率でしかありえないですよ。あなたが知っている司とは同姓同名とかじゃないですか？」

司の言葉を聞いて、自然と嬉しさがこみ上げる。

「司……俺の幼馴染の方な？は、弟がいるって言ってた。双子と見間違うほどに瓜二つなんだとよ。お前が司の弟なんじゃないか？」

「……何を」

「それでも認めないか。いいぜ、俺の予想が正しければそのメガネに書かれてるイニシャルはM・Kじゃないか？」

やつと諦めたか、目の前にいる司はゆっくりと話し始める。が、それは俺も知らない、耳を疑うほどの話だった。

「正解ですよ。僕の本当の名前は……めんどくさくなるし、話すのはやめときますが、司は実の兄です。僕はその兄を

殺して、兄としてこの船に乗りました」

殺した、という単語に俺は思わず司から目が離せなくなる。それは、ここにいた全員がそうだったと思う。

「こ、殺したんですか?……なんで」

玲奈が声を詰まらせながら聞くと、司は笑いながら反応する。

「そりゃあ、死んでくれと言われたら抵抗するしかないでしょう? 正当防衛ですよ」

死んでくれと言われた? 何故? 俺たちを置いてけぼりにして、司は話を続ける。

「もとは向こうが僕を殺そうとしてきたんですから、僕には一切の非はないですよ」

誰も喋れなくなつてから少しした後、司が誰も理解できてないことに気付く。

「あ、もしかして全員兄弟を使つてないんですか? そもそも、その話を知らないつてこともありますか? それなら、言わない方が良かったですね」

間髪入れず、また司が笑みを浮かべながら話を続ける。

「それなら、僕も暴露に移りましょうかね? いいでしょう。……これは、生前の兄から聞いた話なのですが、復元装置つて、この宇宙船が造られた五十年前程まではドイツのある科学者が発表したオカルトとして処理されていたらしいんで

すよ」

脈絡のない話をされ、俺は困惑する。

「……話自体はうつすらと聞いたことはあるよ。最近だつて『人間を分解するなど非倫理的だ』とか『安全性が確認されていない』とかのデモが起きたりしてたよね」

唯華が怪訝そうな顔をしながら補足する。

「そう、当時は地球が滅亡するなんて考えもしてなかったから、わざわざリスクを冒してまで利用する必要はないと言われてたらしいんです。そのうえ、その科学者は当時、復元装置を発明するまでの過程で、人に装置を無理やり使用させ、死亡事故を起こしていたことが判明。科学研究連盟を脱退させられたうえ、装置は一度存在自体を消されたんです」

話を聞きながらも、俺は整理が追い付かない。暴露の話と、昔の科学者の話、何が繋がるのだろうか。玲奈が聞く。

「えっと、それが一体なんの関係が……?」

「その後、その科学者は自身が六十代のときに『この発明は後世に残さないといけない』と考えて、世界各地で天才を探し、一人の日本人を養子に引き取つたらしいんです。あくまで、噂止まりですが」

復元装置、ドイツの科学者、日本人を養子にした……。たどり着いた一つの結論が、頭の中で段々と確かなものに形

成されていく。そして、司の一言で、それが事実となる。

「その科学者の名前は、ヒュン・シユターゼンというらしいです」
「……ヒヨコって、フルネームなんやっただけ？」

源がおそろおそろ聞くと、ヒヨコは何事もなかったかのよう
に、いつも通りの、凜とした表情を崩さずに、丸い眼鏡
を右手の人差し指で上げながら答える。

「私の名前は、……ヒヨコ・シユターゼンだ。一応、言っておくが、
ヒュン・シユターゼンは私の里親、父親にあたる」

四章 玲奈

ヒヨコの言葉に、空気が固まる。確かに、彼女が復元装
置についてさまざまなことを知っていることはずっと不思議
だった。でも、それが発明者の養子だったからとは思いまし
なかつた。全員が喋らなくなった状況を見て、彼女は、不
思議そうに話し出す。

「私が隠していたのはそのことだけだぞ？確かに私は装置の
発明者であり、死亡事故を起こした科学者でもある人間の
子供だ。でも、だからといってそれが大問題だと言う訳では
ないだろう？装置に罪はないように、私にも罪はない。現に、
今君たちがここにいるのは復元装置のおかげだし、私よりも
兄を殺したという司の方が……」

「僕の兄殺しの件の責任はあなたにあるはずでは？確かに、

ここにいるのは復元装置のおかげですが、そんなことよりも
言わなければならないことがあるでしょう？兄が言ってまし
たよ、『悪魔の装置だ』と。それを隠していたのは、あなた
の判断であり、責任であるはずですが」

司が、ヒヨコが話しているところを遮って話す。すると、
彼女は観念したかのように、顔を下に向けてから、私たち
の方を向く。

「二年前に政府の人によれば、装置の開発を依頼された。
父に引き取られてからそれまで、私は一度も他人と話した
ことがなかった。父は私を喋る保存装置としかみてなくて、
父が死んでからも私はその装置の研究を一人でし続けるこ
としかできなかった。だから、あのことをさほど重大なこと
と認識してなかったんだ」

彼女はそう前置きしてから、ゆっくりと、冷静に、あの
こと、について語り始めた。

「開発を始めて二ヶ月ほどが経ったある日、重大な装置の欠
陥に気付いたんだ。復元装置の試作品の被験者になった生
身の人間は誰一人として形を保って復元されなかった。装
置が人間を分解するときに出すエネルギーが強大すぎて、
人間のデータの何割かが何をやっても壊れてしまうんだ。結
局、それは最後まで改善のできないまま宇宙船に使われた」
ヒヨコの言葉が引つ掛かる。改善できないまま？それなら、

私たちがここで生きてるのはおかしいんじゃない。私が聞こうとすると、先に司が意地悪そうに話す。

「だから、何か別の解決案を見つけたんでしょ？その解決案は何だったんですか？そこを説明しないと、僕だけがただ罪が重くなってしまう」

少しの間、ヒヨコは悩むそぶりを見せ、彼の質問に答える。

「装置の問題は、人間を二人用意することで解決できた。つまり、片方をベースとして、壊れたデータの部分をもう片方の人のデータで穴埋めするんだ。そうすることで、元の身体能力や知識は違えど、ベースの記憶を持った人間を新しく復元できるようにしたんだ」

「……待つて、じゃあ、ベースとして使われなかったもう一人の人の方はどうなるの？」

唯華が、少しの沈黙の後に口を開ける。

「人類の存続と無駄な倫理観を天秤にかけたとき、倫理観を捨てるのは仕方ないことだろう？重要なのは人類を一人でも多く生き残らせることだ。もつとも、それをしても多くの人間が復元できなかったが」

ヒヨコが、遠回しだけど、突き放すように冷たく答える。そんな話を、私は一回も聞いたことがなかった。二人を使つて一人を復元する、なんて。それに、その一番の問題は……

「も、もしかして、私たちも別の他人の命を使つて復元されたんですか？」

私は思わず聞いてしまう。答えを聞くことが、とても怖い。乗船者が千万人なのに対し、予備が五百万人分しかなかったことも考えると、絶対にそうだとしか考えられない。案の定、彼女が口にしたのは肯定だった。

「ああ、そうだ。私たちは、『本当の自分だけじゃない自分』だし、人殺しでもある。本当は、みんなには言わない方がいいと思つたんだがな」

彼女の答えを聞いて、私は嫌悪感と恐怖感から来る吐き気におそわれる。気分が悪い。

少しの沈黙の後、一度十分程度の休憩をとることになった。出せるものを出したら、少しは楽になった。ヒヨコは人殺しだと言つたけど、生きるためなんだと考えると少しは気が楽になる。いや、考えないと死んでしまふそうなんだ。私が部屋に戻ると、すでにみんな集まっていた。鷹継が話を出す。

「さっき考えたんだけどよ、復元をするのに一人死ななきゃならないってことは今だつてそうだと思うんだ。つまり、今回、六人から五人じゃなくて、そこからさらに二人しか生き残れないってこと……じゃないか？」

ヒヨコがいつも通り冷静に答える。

「ああ、生き残れるのは正しくは二人だけ、だ。……混乱が起きるから隠そうと思ってたが、上手くはいかないな」

二人しか生き残れない。そんな事実にも、あまり驚けない自分がいた。全部を受け止めてたら壊れてしまうんだ、と思った。それはきつと周りも全員同じで、対して動揺も沈黙も少なかった。源が笑いながら話す。

「確かに、隠してくれた方が遥かに気分は楽やったな。まあ、しゃあないけど」

さっきの会話の時よりも、空気が明るいのは、全員、疲れてるからだと思う。司が話を紡ぐ。

「じゃあ、どうします？誰が生き残るべきか投票して選びますか？正直、僕は選ばれそうにないのでどちらでもいいですよ」

確かに、私が生き残るためなら投票が一番可能性があるだろう。でも、どうしてもそんなにして生きたいとは思えなかった。私は、今日の会話を思い出しながら、提案をする。

「クジで決めるのはどうですか？」

ほんの少しの沈黙をおいて、唯華が私に反応する。

「クジね。いいよ、最後くらいは楽しくやってみよう」

そこから数分後、私たちはクジの置かれた机に囲んで立っていた。ヒヨコが声をかける。

「それじゃあ、一斉にクジを引くぞ……」

ヒヨコの掛け声とともに、私たちはクジを引いた。